



(2004年5月)

【本学会活動状況】

1. 大会開催報告

平成16年度日本植物病理学会大会は、昨年度の大会と同じ日程で平成16年3月28日から30日までの3日間にわたり福岡国際会議場で開催された。期間中に桜は満開にはならなかったものの、30日の午前中に雨が降った以外は天候にも恵まれた。当初、九州という地理関係から参加者ならびに講演申込の数について心配したが、一般、学生登録者ならびに招待者を含めて889名の方々の参加を頂き、421題の講演が行われて盛会となった。また、懇親会は会場に隣接する福岡サンパレスで開催し、招待者を含めて541名の参加者があった。名誉会員、大会顧問の野中福次先生の乾杯で開宴し、いささか混雑した状況ではあったが約2時間にわたる和やかな懇談が行われ、大会顧問の佐古宣道先生の一本締めで盛会裡に終宴となった。

昨年度の大会と同様、学生参加者の参加費を安く設定するとともに、講演要旨予稿集代金を含めて大会参加費を振り込んで頂いた。昨年度の大会では要旨代金の二重振込が多数生じたとのことであったが、システムを急変することは混乱の基であることから昨年度の方式を踏襲した。結果として、若干の二重払いが生じるとともに、大会参加者の所属機関における会計処理上、参加費に要旨集の代金が含まれていることは不都合であるとの苦情が数件あった。今後検討すべき事項であろう。

今回の発表形式は、時代の流れに逆行するOHPシートを用いた方法に戻させて頂いた。これは、5会場並列で12分間隔の講演を円滑に進めるためには多大の人力を要することと、大きな会場に見合った液晶プロジェクターを準備するための費用が莫大であることからの苦渋の判断であった。

講演申込については、今回も大阪大会以来の要旨原稿を添付書類とした電子メールを用いる方式を採用した。これは、その後のプログラム編成、要旨集原稿作成等には大変有用であった。しかしながら、これは申込締切時刻直前の

数時間の中に申込のメールの大半が殺到する状況を生み、原因は不明であるが事務局で把握できない数件のメール未着問題が生じた。今後もこの方式が踏襲されるならば、講演予定者には数日中に大会事務局からの講演申込に対する返信メールがない場合は、直ちに問い合わせることを徹底させることが肝要である。

終わりに、九州地区の大会運営委員および座長の皆様、学生アシスタントをはじめ、学会幹事ならびに学会事務局の方々の御協力・ご尽力により、本大会を成功裡に終えることができたことを心より御礼申し上げる。(高浪洋一)

2. 研究会開催報告

(1) 第7回植物病害生態研究会

第7回植物病害生態研究会は、平成16年3月31日(水)九州大学箱崎キャンパスの農学部5号館において、「個体識別マーカーによる病害の生態研究」をメインテーマに開催された。出席者数は106名で、都道府県関係38名、独法関係28名、会社関係24名などが主体であったが、今年は大大学院生を含む大学関係者の出席もかなりみられた。最初3題は、メインテーマに沿い、鳥取農試の長谷川 優氏が「発光遺伝子で追うイネ内穎褐変病の生態」、宮城古川農試の笹原剛志氏が「イネ葉いもちの主要伝染源は何か?」、福島農試の山田真孝氏が「イネ穂いもちの伝染源はどこからか?」と題した内容で熱のこもった講演をされ、座長の竹内徹氏(道立中央農試)の司会で活発な議論が交わされた。また、後半の2題は石黒 潔氏(東北農研)が座長を務め、まず九大院理学府の岩永亜紀子氏は数理生物学から病害生態の解析を行って「マルチラインによるいもち病最適防除計画—理論の側面から—」と題した講演をされたが、大きな反響を呼び、非常に活発な討論で盛り上がった。さらに、佐賀果樹試の井手洋一氏は「果樹病害虫防除における減農薬の実践—EBCの延長線上に減農薬の姿あり!—」と題した講演で、現在学会の主流となっている研究と実際の病害防除の現場との乖離を埋める問題提起とな

る新しい研究領域の紹介をされ、注目を集めた。次回は大会前日の午後（3月28日）に大会会場と同じ東静岡駅前のグランシップにおいて開催予定である。（石黒 潔）

(2) 第14回殺菌剤耐性菌研究会シンポジウム開催報告

平成16年3月31日、福岡市の九州大学農学部で、約120名の参加を得て開催された。べと病や疫病に対する新規薬剤「ベンチアバリカルブイソプロピルの作用性と感受性検定方法」をクミアイ化学の三宅 裕氏が紹介した後、「QoI-inhibitory fungicides - a review」をBASFのStierl氏が、また「Resistance status and management for QoI fungicides」についてSyngentaのGisi氏がそれぞれ話題提供した。QoI剤（ストロビルリン系薬剤）は広い防除スペクトラムや卓越した効果によって、今日世界で最も重要な薬剤であるほか、今後も新規薬剤の登録が見込まれる。しかしこれらの薬剤は、耐性菌リスクが高いことでも知られることから、耐性菌対策が今後とも重要な課題となる。

次に、佐賀農業センターの稲田 稔氏が、「九州における耐性菌問題の現状—施設野菜類を中心に—」と題して、イチゴ炭疽病におけるストロビルリン系薬剤耐性菌の発生など最近の話題を紹介した。そして西日本で大きな問題となってきた、シタロン脱水酵素阻害型メラニン生合成阻害剤（MBI-D）耐性について、九州沖縄農研の荒井治喜氏は「イネいもち病の発生動向と防除上の諸問題（MBI-D耐性菌問題を中心に）」の中で、2003年の各地における耐性菌モニタリングの結果や、DNAマーカーを用いた耐性菌の遺伝的解析結果を発表した。

最近我が国でも麦類の赤かび病に対する関心が高まっているが、中国では本病でベンゾイミダゾール系薬剤耐性菌の出現が知られている。Mingguo Zhou (Nanjing Agricultural University)はこの問題を中心に、「Disease control and current status of fungicide resistance in China」について講演した。今回は3名の外国人スピーカーを招待したほか、いずれの課題に対しても参加者の関心が高く、会場では活発な質疑応答が交わされた。

なお当研究会では昨年、各地域における耐性菌情報などを迅速に収集、公開して、活動をより役立つものとするために、8名の運営委員を選出した。また研究会のホームページを立ち上げた。URLアドレスは<http://jns.ixla.jp/users/taiseikinken863/index.html>である。今後も拡充を図る予定であるので、関係各位の積極的な活用を期待している。シンポジウムの講演要旨集購入（1部2,000円）を希望される方は、研究会事務局（農環研農薬影響軽減ユニット、TEL & FAX: 029-838-8307, E-mail: hideo@niaes.affrc.go.jp）

までご連絡下さい。

（石井英夫）

(3) 第7回植物ウイルス病研究会

今回の研究会は3月31日に、福岡市の九州大学国際ホールで開催された。参加者は約150名であった。「ウイルス・ウイロイドの遺伝的多様性と宿主適応」のセッションでは、ウイロイドの病原性と宿主適応（佐野輝男氏）、国内のカンキツが保毒するウイロイドと温州萎縮ウイルスグループの多様性（伊藤隆男氏）、ヤマノイモに発生するpotyvirusの多様性と起源（藤 晋一氏）が紹介され、恒例の「特別講演」では、ソウル女子大学植物ウイルスジーンバンクのK. H. Ryu氏より、Analysis of Cucurbit-Infesting *Tobamoviruses* and Plant Virus Sequencing in Koreaについて、佐賀大学農学部の渡邊啓一氏より、タンパク質構造の柔軟性、動きと機能発現機構について、最新の成果が示された。「植物ウイルス分類の動向」のセッションでは、大木 理本研究会代表が植物ウイルス分類についての最近の動きについて紹介され、「植物とウイルスの相互作用」のセッションでは、ウイルス由来配列を利用した多重遺伝子発現系に関する研究（平塚和之氏）、RNAサイレンシングがウイルス間相互作用に及ぼす影響（園田昌司氏）が紹介された。開催地と関連した「九州・沖縄のウイルス病」のセッションでは、南九州におけるパッションフルーツのウイルス病について（岩井 久氏）、弱毒ウイルスを利用したサツマイモ帯状粗皮病の防除（山崎修一氏）について、またトマト黄化葉巻病関連の話題として、トマト黄化葉巻病の現在及び新系統発生の可能性（上田重文氏）、媒介虫の生態特性に基づいたトマト黄化葉巻病の防除技術（小川恭弘氏）について、最近特に九州において話題となっている病害について紹介された。研究会では活発な議論がなされ、盛会のうちに終了した。

韓国植物ウイルス病研究会との交流会もますます定着し、ソウル女子大学のK. H. Ryu氏の他、韓国植物ウイルス病研究会代表の江原大学農科大学のJ-K. Choi氏が参加され、日本側から何人かが今回の韓国の研究会に参加する予定である。今回の研究会は、私の他、鹿児島大学農学部岩井 久氏、九州沖縄農業研究センターの岩波 徹氏に開催地幹事をしていただいた。なお、講演要旨集（1000円）をご希望の方は、大阪府立大学の大木 理代表、ohki@plant.osakafu-u.ac.jpまで連絡していただきたい。

（大島一里）

【書評】

坂井道彦・小池康雄 編著『ぜひ知っておきたい 農薬と農産物』B5判 250頁，発行：2003年11月 幸書房
¥2400円（税別）

近年ほど食の安全性への関心が高まっている時代はないであろう。農薬に関しても輸入野菜での基準値を超えた農薬残留，無登録農薬の使用や農薬の適用外使用などが明らかにされ，消費者に無秩序に農薬を使用した農作物生産が行なわれているのではないかとこの憶測や疑心を生じさせているのも事実である。

本書はこのような消費者の不安に答えて，農業生産における病虫害防除の実態とその中における農薬の役割・安全性について正しい知識を伝え，農作物生産に対する理解を深めてもらうことを意図して出版された著書である。したがって，全編を通して平易な文章で書かれており，農業になじみが薄い読者でも抵抗感なく読めるようにとの配慮がなされている。内容面でも，農作物の成り立ちから始めて，自然生体系と農耕地生態系との違い，作物での病虫害による被害の実態，農薬開発の歴史，病虫害防除対策としてどのような方法があるのか，農薬の開発から登録までの仕組みとその安全性の評価がどのように行なわれているのか，農薬の作用機作・施用方法と生産現場での防除の実態，IPM（有害生物総合管理）の考え方と取り組み実態など，この分野に初めて接する人を意識した丁寧すぎるほどの解説がなされ，また，興味深いアジア諸国での農薬事情も紹介されている。

著者はいずれも農薬会社や試験研究機関で農薬の開発，登録あるいは病虫害防除技術の開発に長年打ち込んできた人達であり，その間に蓄積された専門的に深い見識が平易な記述の中から伝わってくる著書となっている。

編者らが本書で最も訴えたいのはおそらく最後の2章であろう。農作物生産における農薬の必要性を正しく理解した上で，農薬の安全性に関する情報を科学的な眼で判断するとともに，地球環境の変化，世界人口の増加，化石エネルギーの限界など課題を抱える農作物生産を今後どのような姿で行なうべきか，その中で農薬をどう位置付けるべきかを考えさせるものとなっている。

本書は単に一般消費者，農産物の流通に関わっている人

達に留まらず，農業生産技術に関わる研究者，技術指導者にも是非読んでもらいたい著書である。また，大学で作物保護学あるいは病虫害防除論を専攻している学生にとっても格好の参考図書となるものと考えられる。（吉野嶺一）

【学会ニュース編集委員コーナー】

情報提供および投稿のお願い

本ニュースは身近な関連情報を気軽に交換することを主旨として発行されております。会員の各種出版物の御紹介，書評，会員の動静，学会運営に対する御意見，会員の関連学会における受賞，プロジェクトの紹介などの情報をお寄せ頂きたいお願いいたします。

投稿宛先：〒170-8484 豊島区駒込1-43-11

日本植物防疫協会ビル内

学会ニュース編集委員会

FAX: 03-3943-6086

または下記学会ニュース編集委員へ：

松山宣明，阿久津克己，加来久敏，堀江博道，富岡啓介，各委員宛

編集後記

学会ニュース第26号をお届けします。福岡で15年ぶりに開催された平成16年度日本植物病理学会大会は，九州大学を中心とした九州地区学会員および学会関係者の皆様のご尽力・ご協力によって成功裡に終了したことが大会実行委員長の九州大学高浪洋一氏から報告されました。関係者の皆様に心から感謝申し上げます。また，学会に引き続いて開催された第7回植物病害生態研究会，第14回殺菌剤耐性菌研究会シンポジウム，第7回植物ウイルス病研究会印象記（石黒 潔，石井英夫，大島一里氏）を掲載致しましたのでご一読ください。なお，新学会長講演要旨，学会賞受賞者講演要旨，学術奨励賞受賞者，論文賞受賞者，日本農学進歩賞受賞者，永年会員，学会貢献者のご紹介は原稿締め切り日の関係で次号に掲載予定です。（松山宣明）